

(3) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究部門①人との関わり

虫を呼ぼう大作戦～協同性・仲間と力を合わせた目的の実現～

山浦 律子（福島県・幼保連携型認定こども園南町こども園）

- ・ 課題研究部門②遊びと学び

子どもが「探究」しやすい環境づくり—宇宙プロジェクトを通して—

柏木 あずさ（神奈川県・大野村いつきの保育園）

子どもの主体性から生まれた学び～日常の延長上に運動会を捉える～

鍋谷 須美子（富山県・幼保連携型認定こども園西田地方保育園）

- ・ 課題研究部門③子どもの健康・安全

生きる力を育む炊き出し訓練

桑田 幸生、野村 美樹、伊藤 千晶、大塚 裕子、大塚 貴史（神奈川県・子中保育園）

運動を通して育つ健康な体と心～こども一人ひとりの心身の発達をめざして～

仲西 久美子（沖縄県・第2愛心こども園）

- ・ 課題研究部門④【第16回特別テーマ】新型コロナウイルス感染症対策について

お互いの命を守ること、子ども達の命と学びと遊びを守ること

◎新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム結成による実践報告

新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム（東京都・社会福祉法人東京児童協会）、馬場 与志子（すみだ川のほとりに笑顔咲く

ほいくえん)、前島 記子 (ひらがなのツリーほいくえん)、石田 安
方 (台東区立たいとうこども園)、斎藤 香織 (事務局)

〈自由研究部門〉

感覚統合の視点を持った保育

伊丹 陽 (福島県 (研究会員)・ユーパロ室ノ木保育園 ユーパロつ
つみ分園)

保育室ジャングル計画～昆虫に夢中！集中！成長中！～

中村 鮎美 (東京都・羽村まつの木保育園)

園内研修からの保育者の振り返り、次へのステップ

井上 美幸 (東京都・府中めぐみ保育園)

遊戯室の利用実態Ⅰ—保育者の気づきに着目して—

浅香 聡彦、藤井 しのぶ、安田 未有 (石川県・大徳学園)

五感を刺激する関わり

青野 ちひろ (愛知県・光徳保育園)

「思いやりの心」を育むことこそ「道徳教育」に繋がることを発見した

儀間 千夏、眞喜屋 亜沙子 (沖縄県・愛心こども園)

課題研究① 人との関わり 虫を呼ぼう大作戦 ～協同性・仲間と力を合わせた目的の実現～

福島県・幼保連携型認定こども園 南町こども園 山浦 律子

1. はじめに

現在少子化が進み、地域でも異年齢の子どもと遊ぶ機会が少なくなり、子ども社会の伝承や文化が伝わりにくくなっている。そのため当園では、意図的に異年齢で生活する場を作り、異年齢児との関わりを体験し人間関係を学べるようにと、3・4・5歳児は異年齢クラスで教育・保育を行ってきた。しかし、異年齢の関わりから学ぶ人間関係も大切だが、同年齢だからこそ楽しめるもの、経験してほしいことがあるのではないかと園長からの提言を受け、改めて同年齢での活動を見直すきっかけとなった。

当園は、令和2年6月に保育園から幼保連携型認定こども園になり、“保育所保育指針”から“幼保連携型認定こども園教育・保育要領”を基にした教育・保育を行っている。『教育及び保育の内容並びに子育て支援等に関する全体的な計画』をはじめ、それまでの指導計画の全てを見直し、改めて、教育・保育に取り組んでいる。

当園の教育・保育目標の一つに“仲間と力を合わせることを大切にすることも”がある。そこに焦点を当て年長児の関わりを見た際、個々での制作活動や気の合う園児同士4、5名での遊びは充実している。一方、集団で一つのことに取り組む姿はあまり見られず、課題となっていた。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の『協同性』「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」と教育・保育要領に明記されている。解説書には「5歳児の後半には、その目的の実現に向けて、考えたことを相手にわかるように伝えながら、工夫したり、協力したりし、充実感をもって園児同士でやり遂げるようになる。」とあり、当園の教育・保育目標につながるものと感じた。

年長児が仲間と共通の目的に向かって取り組む中で、どのように『協同性』が育まれていくのかを友達や保育教諭との関わりから変化や育ちについて考察し、今後の『協同性』を育むための環境設定につなげ保育の質を高めていきたい。

2. 研究の目的

年長児活動では、自分の考えを表現することが苦手な園児、保育教諭に伝えることで満足してしまう園児、自分の考えを伝えることはできるが、友達の意見を聞くこ

とが苦手な園児等、集団で何かに取り組むことを苦手とする園児がいるため、遊びが深まらないように感じた。

本来『協同性』は、遊びの中で共通の目的を見いだし取り組んでいくことで育まれるものであるが、今回の取り組みでは『虫を呼ぼう大作戦』と題し、担任がきっかけを提案することからはじめた。

昨年（2020年）、当時の年長児が昆虫や爬虫類を飼育する中で、自分たちで図鑑等を見ながら飼育するのに必要なものを話し合っている姿を見ていたこともあり、当時年中児が年長児となった現在も虫を見つけると図鑑で調べることを自然に身につけている。

しかし、現在は園の周辺の宅地化が進み園庭で見られる昆虫が少なくなり、園庭にいる蟻やダンゴムシで喜んでいる状況にある。そこで、より虫の来る環境を作るといった共通の目的に向かって取り組む際のエピソードをもとに『協同性』がどのように育まれていくのか年長児担任と振り返りを行い、園児の育ちを見ていくことと、今後の保育環境の充実につなげることを目的とする。

3. 研究方法

【研究期間】 2021年4月～10月

【対象】 年長児 18名(男児：9名 女児：9名)

【収集の方法】 月に数回ある年長活動の時間かつ、『虫を呼ぼう大作戦』の活動期間中の年長児同士の会話を中心に記録する

【記録の観点】 年長児の興味関心・年長児同士の会話・担任の関わり

【分析方法】 実践記録をもとに幼児担任と振り返りを行い園児の興味や変化を読み解く

4. エピソードと振り返り

〈エピソード 1-①〉 “虫を呼ぶためには？”

4月 中旬

『虫を呼ぼう大作戦』1回目担任から空き地に虫を呼ぼうという提案をし、虫を呼ぶためには何が必要かを話し合う。

話し合いを進める中で、A、Bの声が大きく、担任に向けての一方的な発言となるが、花や草が必要という本児の意見には友達も同じ意見のようであった。そこから、花や草を増やすためにどうするかを話し合ってもらったところ、家庭で花の種



を蒔いた経験のあるCから「花の種を蒔けばいいんじゃない、私、この前お家で種まきしたよ」という意見が出た。

C「何人かで一緒に（花の種を）蒔いたらいいんじゃない？」

保「グループを作る？」

C「うん、グループでやった方が、花咲くと思うよ」

B「それいいね、そのほうがいいよ」



【振り返り】

自分の意見を通そうとすることの多いBだが、種を蒔いた経験のあるCの提案であるグループを作るという案を受け入れる事ができていた。

Bとしては、自分にはない経験をしているCに対しての信頼が強くなったようで、相手を認めることができたことから意見もスムーズに受け入れることができたのではないかと感じた。（後日、みんなで百日草、クローバーの種を蒔いた。）

担任がグループを作ることを提案したが、園児から案が出るのを待つことで話し合いへとつながったのではないかと感じた。

《エピソード 1-②》 “グループ作り”

Cの提案からグループを作ることとなり、グループの数や1つのグループの人数を決めることなく、園児同士で話し合い決めていくことにした。その中でFがグループ決めの輪から離れたところにいる。

D・E「F、こっち来なよ」

F「……」（その場を動かず）

A「こっち来たらず？」

F「……」（Aのいるグループに近づき、そのグループに入る）

【振り返り】

Fは普段、自分の興味のあることに集中し、友達との関わりを求めることは少ない。今回は入りたいと思うグループはあったが、自分から入る事はできずにいた。始めの声かけでは反応をしないことで、自分の入りたいグループは別にあるという気持ちを表現していた様子。2回目の声かけでは微笑みながらグループに近づいていくことで、声をかけてもらえたことの嬉しさが伝わってきた。

担任としては、Fに自分から動いて欲しいという気持ちがあり、声をかけるのではなく、見ていることを目を合わせることで伝えていた。そのことで、Fも自分からは声をかけるところまではいかなかったが、不安になることなく次に声をかけてもらえるのを待つことができたのではないかと。

また、D・Eは、Fの気持ちを理解し受け入れることができていたのだと感じた。相手にしてあげたいと思ったことが受け入れられなかった事に淋しい気持ちもあったかと思われるが、相手の気持ちを尊重し受け入れることができていたことに対し年長担当から「ありがとうね」と声をかけるとD・E共に笑顔でうなづく姿があった。

AはFが自分たちの方を見ていることで、自分のいるグループに入りたいと思っていることに気づき、選んでもらったことが嬉しかったようで口調も穏やかに声をかけていた。

《エピソード 1-③》 “グループ名を付ける”

グループの名前を決める際、グループ毎に輪になり話し合いをすすめていく。

遊びの中では、B、A共に自己主張が強いため、トラブルとなることも多い。しかし、今回は虫が好きという共通点があり、同じグループとなった様子だが、話し合いの場面では、相手や他の友達に意見を出すのではなく、担任に向けての発言となった。担任はグループ内で話し合っていて欲しいことを伝える。

別のグループのGが同じ虫の名前をあげたことで、B、Aは自分たちが先だったことを主張する。自分の意見を出せるGだが、今回は気まずさがあったようで、無言を通そうとする。話し合いとなる様子がなかったため、担任が問いかけをすると、虫に興味のあるBが別の虫の名前を提案し、解決していた。

B「カブトムシが良い」

A「クワガタが良い」

保「私じゃなくてグループのみんなと相談してみて」

B「ヘラクレスが良い」

A「それがいいんじゃない」

G「ヘラクレスが良い」

B「僕たちが先に言ったんだよ」

G「……」

A「そうだよ、こっちが最初に言ったんだよ」

G「……」

保「どうしようか、他に何か虫いるかな？」

B「オオスズメバチとか？」

A「それいいね」

【振り返り】

Gがいることで、本来ならば自分たちで話し合い解決して欲しいという思いがあったが、今回は、Gが黙ることでの意思表示だったため、担任が声をかけた。そのことにより、虫の知識について刺激されたBはヘラクレスにこだわるよりも、別の名前を考えることに意識が向いた様子。普段の遊びでは、Bに対し、負けたくない気持ち

ちが強く出るAが、すぐに意見を受け入れていたことから、虫に関してはBに対して認めている部分があるのだと伝わってきた。

今後、互いに認め合える部分が増えていくことで、遊びでの関わりにも変化が見られるのではないかと感じた。

《エピソード 2-①》 “畑作りしながら役割分担”

7月になり、トマトの苗をたくさんいただくことになり、年長児の空地にも畑を作ることとなった。

話し合っただけで作業に入ったわけではないが、取り組みの中で、自然と仕事分担が決まっていた。活動の途中で、Hは直接的な作業ではなく、応援にまわっていた。Fは、自分の興味あることに対する集中力はあるものの、友達の遊びに興味を持つことが少ないところがある。

H 「土を広げるとき、土あんまり踏まない方が良いよ」
J・E 黙々と土を広げていく
保 「J、Eたくさん広げてくれてるね」
D 「みんな、頑張れ」
H 「(一緒に作業を行っていた保育教諭に向かって) やんなくても良いよ」
H 「石を並べて畑の枠にしようか」
D 石を並べはじめる
H 「(石を並べながら) 平らにしてる」
「踏まないでB」
F 虫探しに夢中
A 「F、仕事して」
F 土を広げはじめるが
すぐに虫探しになってしまう。
H 「(みんなに向けて) あきらめないで」
A・D 「あきらめないよ」
H 「もう、畑になってきたんじゃない」
保 「土が広がってきたね、あとどうすれば良い？」
B 「畝？作るんだよ」
保 「そうだね、畝を作る」
保 「畑ができたね、今度はここにトマトを植えようね」
H 「みんな、あきらめないで頑張ったよね」



【振り返り】

Aは、集団での取り組みに積極的に参加するが、友達にも同じように取り組んで欲しい思いが強い分、トラブルとなってしまうことも多い。今回の活動では、Hが応援にまわったことに対して何も言わなかったことから、それまでのHの働きを認めていたからだと感じた。また、Fに対して一度は作業参加への声かけがあったが、Fが虫好きということを知っていてFの行動を受け入れているところもあったようだ。

Hの「みんな、あきらめないで頑張ったよね」という言葉の中に自分たちで作上げた満足感が感じられた。

Fは、畑を作るという活動に興味を持ってないままであったが、虫を探せるため、空き地に来ることを楽しんでいるようである。畑作りには興味を示さなかったが、虫を呼ぶ活動には興味を持てると思われるので、そこから友達との関わりが広がっていくことを期待する。

《エピソード 2-②》 “リボンの使い方”

Bが、苗を植えるのには苗の間隔が2m必要であることを図鑑で調べた。2mを見てすぐにわかるように作った2mのリボンをBが持って、畑に移動する。

H 「ここにする」
保 「次の人はどこにしたら良い？」
A 「Bのリボンを使うと良いんじゃない？」
B 始めは、自分だけで2mを知らせたかった様子だが、うまくいかず「Aここ持ってて」
A 「いいよ」
その後、BとAでみんなの分を測っていた。
保 「B、Aみんなの分測ってくれてありがとうね。すぐに2mの長さが分かって、みんな助かってたね」
B・A はにかんだような笑顔を見せる。

【振り返り】

Aは、自分もリボンを持ちたかったが、普段、意識し合うあまりトラブルとなる事も多いBが持っていたため、「貸して」と言うことができずにいた様子であった。一方、Bは、知識が豊富なため教えてあげることが得意であるが、友達の意見を受け入れることが苦手なところがあり、普段の遊びの中でトラブルとなることもある。

AはBへリボンを使うことを提案し、自分もリボンを使えるように考えたようであった。Bは一人でやろうとするがうまくいかない事に気づき、提案してくれたAの力を借りることにし、2mを測ることに成功した。

今回の取り組みで、二人とも友達と行ったことでうまくいく体験をすることができた。Aも始めはリボンを持ちたいという気持ちが強かったが、その後もみんなの分の2mを測っていたことから、力を合わせることの楽しさを味わうことができたようだ。

また、担任は作業の最後に、A・Bに対して友達のために仕事をしてくれたことが嬉しかったと伝えることで、より自分の行動が相手に与える影響を感じて欲しいと考えた。二人の表情から担任に認められたことの喜びと、友達とやり遂げたことの満足感が感じられた。

友達と自然に力を合わせるという経験ができ、友達や保育教諭に認めてもらえた経験が今後、二人の友達への接し方に変化がみられるのではないかと考える。

《エピソード 3-①》 “図鑑で調べよう～図鑑を作ろう”

草や花が茂り、トマトの収穫のときにも虫を見るようになっていたため、虫を探しに行きたいということで、

年長児全員で空き地に行き虫探しをする。

J「ねえ、ここに虫いるよ」

B「なんだこれ」

A「図鑑持ってくれば良かったね」

保「図鑑で調べたいね」

B「この図鑑作れば良いんじゃない？」

A「いいね」

保 写真を撮る

A「この虫も写真撮って」

F「ここにも虫いるよ」

保 Fの声に写真を撮りにいく。

H「Fこっちにも虫いるよ」Fを呼び一緒に虫を見る。

H・Fのもとに他の園児も集まり一緒に観察しはじめ。

担任の動きから他の園児も虫を探すことに集中する。



【振り返り】

普段から見つけた虫を図鑑で調べることを行っているため、見たことのない虫を見て、図鑑を持ってくることを考えたAの発言を受け、自分たちの図鑑を作るアイデアを出すBと、そのアイデアを受け入れるAの姿が見られた。担任は図鑑作りの材料として写真を撮ることにした。写真を撮っていることに他の園児も気づいたことで、二人だけの取り組みではなく年長児全体の取り組みへと向かっていることが感じられた。

Fも自分の知っている虫についての知識を友達に話すなど、少人数の中ではあるが中心的存在になることができていた。F自身の表情から自信を持って発言していることが伝わり、周りの園児も自然にFの意見に耳を傾けていた。

後日、Fが画用紙で作った虫や毛糸で作った蜘蛛の巣を使い箱の中に虫の家を作ると、興味を持った友達が集まり、Fが箱の中の説明を聞く姿が見られた。出来上がったものに対するFの満足感と友達がFを認めていることが伝わってきた。

《エピソード 3-③》 “図鑑作り”

図鑑を作る段階になると、虫の絵を描くときなど図鑑を見ながら取り組んでいるJが中心となる。今回は、虫の絵ではなく写真を載せたいとのことで、担任は、写真をA4版の用紙に一匹ずつ印刷したものを用意する。

調べていくうちに普段見ている図鑑にはいない幼虫がいることで、J、Aが図書コーナーに行き幼虫が載っている図鑑を探す。

その後、今まであまり興味のない花についても調べはじめ、そのために必要な図鑑をまた二人で探し始め

る。その様子を見て興味を持った園児が二人の周りに集まり、一緒に図鑑を見ながらの作業を進めていた。

図鑑ができあがると、職員室にいる保育教諭に見せに行く。

J「この虫、どっかで見たことあるな」

A「あっち（図書コーナー）にあるやつじゃない？」

図書コーナーへ行き、図鑑を探し部屋に戻り作業を進める。

二人のもとに数人が集まり、図鑑と写真を見比べながら話し合う。甲虫は似ているものがあるため、すぐには判断できないものもあったが、各自が自分の似ていると思う部分や、違うと思う部分を出し合いながら話し合いがすすむ。

意見が合うと、用紙にJが名前を書いていく。空き地に咲いていた花も同様に調べていく。

（職員室へ手作り図鑑を持って行く）

A「これ見て、できたよ」

保「よく調べたね」

A「ここは、Jが書いたんだよ」

J 保育教諭をみて微笑む。

A「ここは、僕が書いた、ここはBで、ここはね」

【振り返り】

空き地の図鑑を作ることを提案したBであったが、図鑑を作る作業へは興味を示さず、図鑑作りをするまでの話には参加していなかったJが、積極的に参加していた。それぞれが自分の得意なところで今回の活動に参加していることが感じられた。

見慣れている図鑑には載っていないものも、別の図鑑があったことを思い出し探しに行ったり、今まであまり興味のない花へも興味を持ったりするきっかけとなった。

Aは、遊びの中でもJの意見を受け入れやすく、Jを信用して楽しんで作業をすすめているようであった。そのため、友達の参加を受け入れ、ときには自分と違う意見にも耳を傾けることができていた。

自分たちで作上げたものを見て欲しいという行動から、満足のいくものが出来上がったのだろうと感じた。職員室の保育教諭に自分たちで調べられたこと、みんなで作ったことを認めてもらえたことで、微笑みあう姿から一緒に作り上げたという満足感が伝わってきた。

Aがまず、Jが書いた箇所を保育教諭に見せていたことから、Jを認めていることが伝わり、その後も自分だけでなく誰が書いたかを教えている姿から、みんなで作った楽しさと嬉しさが伝わってきた。

《エピソード 3-④》 “自分たちの図鑑”

自分たちで作った図鑑を持って空地へ行く。A・Jが

中心となり作成したため、Aが持って行くことをみんな受け入れていた様子。

A「この虫は載ってないな、写真撮って」

B「こっちにもいた、これも撮って」

H「これ、載ってたっけ？」

J「カマキリ見つけた」

A「あっ、ここにあるよ、(図鑑を見ながら) これ同じカマキリかな」

J「(扉を指さし) あそこにいたよ」

A「(図鑑を見ながら) これ、この前のカマキリだ」



【振り返り】

まだまだ、自分たちの作った図鑑には載っていない虫がいることや、図鑑にいる虫を発見できたことで、これからも図鑑作りに取り組む意欲が見られた。

空き地に虫を呼ぶという活動から、図鑑を作るという共通の目的を自分たちで持ち、さらに園児の“作りたい”という気持ちが強くなったことで、担任は用紙を準備するだけで作業が進むようになった。また、一度調べた虫のページにも写真の脇に絵を入れるなど工夫が見られるようになり、遊びが展開していくようになった。

5. 考察

《エピソード1》

グループの名前を決める際にはB・Aの意見が通りやすいところや、担任に対して意見を出す姿が多く見られた。そのため、担任の介入が必要な場面もあったが、経験したことのある園児の意見を聞くなど、相手の知識や得意な部分を認め合う部分もあることがわかった。担任は、声かけだけでなく、アイコンタクトで園児を見ていること、気持ちを理解していることを伝えることで、安心して自分の意見を出せるような環境を作っていた。

《エピソード2》

畑作りでは、活動中に、それぞれの得意な分野を互いに認め合い、取り組む姿が少しずつ見られるようになってきた。また、自分の行動が友達の役に立つことを経験することで、友達に対する印象が変わったり、関わりにも変化が見られたりするのではないかと考える。

担任のBへの声かけは、自分が認められる経験を重ねることで友達を受け入れやすくなるようにと考えて行ったと感じた。

A、Bは、トラブルとなる事の多い関係だが、今回は同じ目的に向かって一緒に取り組むことでトラブルとなる事なく取り組むことができていた。互いを認め合うきっかけとなり、二人の関係にも変化が見られるのではないかと感じる。

《エピソード3》

虫を探すこと、調べること、文字を書くことなど、各自それぞれに参加できる方法を見つけて取り組むことができていた。また、図鑑のページ数が増えていることで、充実感が増してくると、個々に調べる事よりも、園児同士、意見を出し合いすすめていく姿が多く見られるようになった。

話し合いの中で、意見の違いが出ると声の大きいAの意見が通りやすかったが、Aが友達の意見に耳を傾けることができるようになったことで、他の園児が自分の意見を出しやすくなり、担任の介入がなくても話し合いが進むようになった。

担任は用紙を提供するだけの関わりとし、図鑑を作っていくうちに、載せる内容も園児同士で工夫できるようにしていた。

6. まとめ

今回の研究では、10の姿の一つである『協同性』が年長児の活動の中でどのように育まれていくのか考察を行った。

エピソード2の中にもあるように、自分自身が受け入れてもらっていると感じ、友達と一緒に力を合わせることの楽しさを経験することで『協同性』に必要な相手を受け入れることができるようになる。

声の大きいA・Bは、今回の取り組みの中からも、互いの得手不得手を理解し、認める姿が見られた。そのことが信頼関係の構築に繋がり、少しずつではあるが互いの意見を受け入れることができるようになり、互いの意見をぶつけ合うだけでなく、話し合うことができるようになったことが読み取れる。

虫が来る環境を作ること目的とした取り組みであったが、取り組みの中で自分たちの図鑑を作るという共通の目的に向けた活動を通し、『協同性』の説明にあるような友達と関わる中で、工夫したり、協力したりしながら遊びを継続させることができるようになった。

園児が信頼関係を築けるようになるためには、自分自身が受容されているという経験が大切であると考え。そこには日々の保育教諭の関わりが大きく影響を与えるため、園児が安心して自己表現できる場を作る事が重要である。そのためにも、日々の丁寧な関わりを心がけていきたい。

参考文献：

10の姿プラス5・実践解説書(無藤隆著・ひかりのくに)
幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック
(無藤隆監修・学研)

引用文献：

幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説
(内閣府 文部科学省 厚生労働省/フレーベル館)

評者：小林 芳文

この研究は、友達や仲間と力を合わせることを大切にする保育・教育を課題にした興味ある研究の取り組みとして拝読しました。「幼児期に育ってほしい10の姿」の協同性の保育・教育目標につながる研究としても研究者は位置づけており、評者としてもこの点に研究の新規性を感じ取りました。

研究では、どのように協同性が育まれていくかをテーマに挙げているように「虫を呼ぼう大作戦」の題のもと、友達や保育教諭との関わりから生まれていく姿を解りやすくまとめられていました。虫を呼ぶ環境性を作ることから、図鑑作りまで展開したことで研究に奥深さができたこと、また、これにより園児の気持ちを促したことが素晴らしいです。願わくば、もう少し各エピソードの展開や、その振り返りに掘り込みがあればと思いました。さらなる研究を望みます。

評者：馬場 耕一郎

空地に虫を呼ぶという子ども達のおもいから生まれた活動であり、遊ぶが深まらないと言う悩みを解決するために生まれた研究です。図鑑をいつでも見ることができる環境を整えていたことは大変良かったと思います。また、活動ごとに振り返りを行っており、自己評価に値します。協同性を育む活動が今後も継続して行われ、たくさんの虫がやってくることを期待しています。

評者：高木 早智子

実践報告の体裁が整っていて、文章もとても読みやすかったです。「協同性」のテーマに基づいて考察されている点も評価できると思います。畑作りや図鑑作りの過程における子どもたちの姿が生き生きと伝わってきて、読んでいるこちらもワクワクしました。子ども同士の関係もよく伝わってきます。園の教育・保育目標に沿った実践だと言えるでしょう。

畑づくりのエピソード中で、長さをはかるための2メートルのリボンを使用するなど、アイデアに感心したのですが、それは子どもたちの中から出てきたのか、保育者の提案だったのか。また保育者から子どもたちにグループ作りの提案をしたのはなぜなのか、振り返りの中で保育者の介入の意図や目的が明確に記されていると、実践研究としての精度がさらに向上すると思います。

これからも子どもたちと一緒にたくさんの発見をして、報告していただけるのを楽しみにお待ちしております。

課題研究② 遊びと学び 子どもが「探究」しやすい環境づくり —宇宙プロジェクトを通して—

神奈川県・大野村いつきの保育園 柏木 あずさ

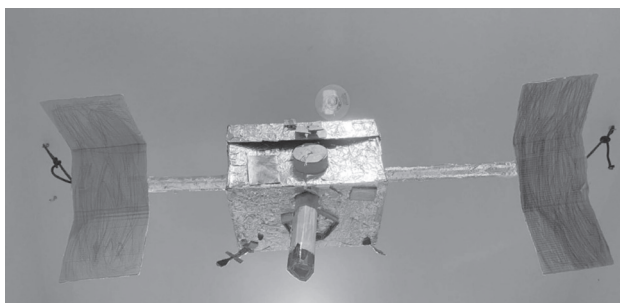
はじめに

子どもたちにとって遊びと学びはなんだろうか。「遊びとは楽しいことをすること。学ぶとは知識を覚えていくこと」だろうか。子どもたちを見ていると、遊びの中に知性があり、不思議に思ったことを試してみ、そこから意味を見つけだそうとしているように感じる。それは、「探究心」という言葉がぴったりである。

例えば「0歳児がティッシュを何枚も何枚も引っ張り出す」ことや「2歳児がどんぐりの殻を何個も何個もむく」など大人には困った行動や意味がなさそうな遊びも探究の一環である。こんな子どもたちの様子は当園の職員の間では頻繁に、素敵な面白い事例としてとりあげられ話が弾むのである。

当園の理念の『七つの願い』の中の一つに、『何故だろう、何故だろう』の不思議に思う心を持ち続けられる人に成ることを願う』がある。この願いは職員が子どもたちの「一人一人探究している心の動きに寄り添い丁寧に保育をしたい」という思いに繋がっている。

乳児の時に大事にされた探究心は積み重なっていき、幼児になるとさらに深まっていく。一人の思いから仲間へ。知識を深め、話しあって考察し発展する。私たちは子どもたちが主体的に探究できるようにする為にどういった環境を作ればよいのか、その思いを保護者や身近な地域社会の人々にも理解して頂き深めていけないかと日々試行錯誤しながら保育をしている。一つの興味から、主体的な成長や発展を続けた一つ、昨年度の5歳児クラスの「宇宙プロジェクト」を取り上げた。それは4歳児クラスの時から始まっていた活動を記録した事例である。考察し、さらに保育の質を高めていきたい。



1. 宇宙プロジェクトについて

(1) 宇宙への興味の芽生え

夏の行事「日帰りキャンプ」で夜の星空鑑賞が楽しみのひとつになっている。ただ眺めるだけではなく、発見する面白さが味わえるように、4歳児クラスの頃、夏の大三角形「デネブ・ベガ・アルタイル」の星座の形や神話について子どもたちに伝えた。キャンプ当日は残念ながら本物の星座は見られなかったが、そこから星座ブームが到来し、三角形の石を見つけ「夏の三角形!」と見立て、枝がさそり座の形だと散歩先から持ち帰っていた。Aは夏の大三角形だけでは足りず、他の星座にも興味を持ち、図鑑を片手に自分で調べ始めた。お家でミニプラネタリウムを買ってもらい星空を眺めていた。神話はより身近な存在にさせるようで「オリオンさん」と呼ぶ子までいて、小さな宇宙への興味の芽が膨らんでいた。

(2) 宇宙プロジェクトのはじまり

進級した2020年4月からコロナ禍で園外へ散歩に出るなどの日常生活を送ることも難しくなった。全員が登園し始めたのは7月。夏の行事も中止になっていたが星座への興味は続いていた。

① 惑星

星座だけでなく宇宙への興味も広がるよう、新しく惑星の模様がくっきり見えた写真が載っている図鑑を買った。子どもの目に入りやすいよう星座や惑星の図鑑、数冊を表紙が見えるように並べ、自由に惑星の表現ができるよう様々な素材を並べていつでも作れる環境を作った。そして惑星への興味も発展していった。

事例1 園内での活動：2020年11月

惑星の本に「火星ではカイコ（非常食）を食べる。芋の味がする」と書いてあり驚いているB。カイコ観察の経験をしているクラスのみみんなに驚きの報告をしていた。色々な素材で惑星を作るC。それに感化され他の子も惑星の模様をボタンやどんぐり、ビーズなどで様々に表現していた（写真1、2、3参照）。

Dは木星の模様に驚き大興奮している。それを見て近寄って来た4歳児に、惑星とは何か、どういう順番なのか模型を使って説明し始め、最後に木星を見せていた。知ったばかりのすごい情報を伝えたくてたまらない様子

だった。この頃から自分たちでプラネタリウムを作ってみたいと言うようになる。

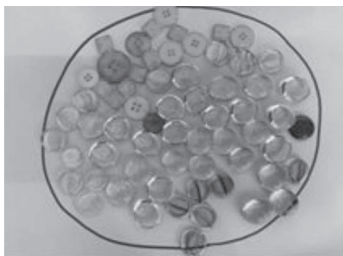


写真1 地球・火星

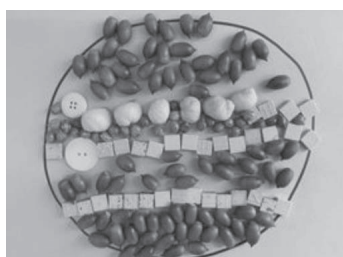


写真2 木星

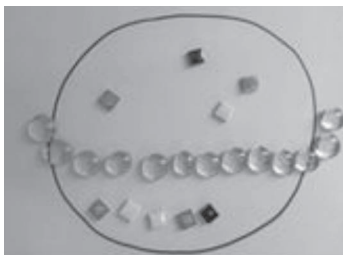


写真3 土星

考察

環境を新しく整えることで、子どもによって惑星にも興味を持ち、図鑑を読み没頭する子、創造力を働かせ表現する子、惑星には興味を持たず星座を深める子、それ以外のことに興味を持っている子、興味を示す方向はバラバラだったが、子どもが自由に選択し、それぞれの活動ができてきた。

② 〈はやぶさ2〉の帰還

「2020年12月6日に〈はやぶさ2〉が地球に帰ってくる」というニュースが流れた。星座、惑星と宇宙が大好きなクラスにこれを生かせないか考えた。自然と興味があわよくやうに部屋にポスターを貼ってみた。文字を読む子はいたが興味はあまり深まらず、〈はやぶさ2〉が、小惑星リュウグウの探査を終え、長い年月をかけて帰還するすごさなど、今一つ実感がわかないようだった。

2. 発見の喜び

(1) プラネタリウム鑑賞

かいこの観察で利用していた相模原市立博物館（以下「博物館」という）でプラネタリウムを見ることにした。4歳児クラスの頃から星座が大好きで、たくさんの神話や星座の形や種類を知っていた。そのため博物館の方と相談し、専門的な星座の名前や形、神話が出てくる小学生の内容を選んだ。

事例1 博物館での活動：2020年11月

プラネタリウムの深い席に座って待つ。場内が暗くなり星空が広がると「お～！！」とため息交じりの歓声上がり、子どもたちの中から拍手が沸きあがる。星をたどって「あそこがおおぐま座だ・・・」と発見し、解説を聞いて自分が知っている星座や惑星について次々と興奮し答えながら星空の世界に浸った。

考察

星座や惑星に出会えた瞬間の歓声や拍手で喜びを表現した子どもたちの姿に感動した。少し難しい内容のものを選んだことで子どもたちは知らない星座もあると知った。初めての星座には目をこらし解説を聞き逃すまいと声も出さず、さらに星空の魅力に取りつかれたようだった。

(2) 遠い存在の〈はやぶさ2〉

どうしたら子どもたちが〈はやぶさ2〉に興味を持てるか考えた。私たちの園のそばには宇宙科学研究所（JAXA）と博物館がありそれを最大限利用したいと考えた。博物館には〈はやぶさ2〉の実物サイズの模型が展示されていた。実際に見ることで〈はやぶさ2〉への興味を深められないかと考えていた。そんな時、博物館の方から「〈はやぶさ2〉の特設コーナーが作られました。帰還前なら人も少ないので見に来ませんか」とお誘いを受け、早速見に行った。どの子も新たな発見に喜んでいたが、観察方法も着眼点がそれぞれ違っていた。

事例1 博物館での活動：2020年11月

〈はやぶさ2〉の模型は想像と違っていたようで「大きい」「小さい」と感じ方はそれぞれだった。理由は「空に飛ぶからもっと大きいものだと思った」と少しがっかりしている子もいた。下からあらゆる部位が細かくみることもでき、「この名前は何？」「なんのためにあるのか？」と疑問があふれ出た。近くに〈はやぶさ2〉のCG動画がありそこに答えがあるのではないかと何度も繰り返し動画を見ている子もいた。Eは動画と模型を往復し、動きを確認した部位を再度確認し「これがソーラーパネルだよ」と説明していた。Fは「〈はやぶさ2〉を同じように作ってみたい」と言う。

考察

実物サイズを見たことで、子どもたちの想像と現実がつながった瞬間だった。好きなように見られる環境を作ること子どもそれぞれの疑問や観察方法の違いに合わせて出来たのが良かった。「〈はやぶさ2〉を作りたい」と言われ、写真を撮ることもできたが、あえて「よく観察して覚えて帰り作ってみよう」と声をかけることにした。発見したことをどう表現するかその可能性を大事にしたいと思ったからである。

3. 探究心の芽生え、広がり

(1) 〈はやぶさ2〉作り

〈はやぶさ2〉を作りたいといったFと園内の材料倉庫へ行き、自由に好きなだけ素材を選ばせることにした。形のイメージや作り方のアイデアがあふれていて黙々と作業を始めた。それを見てやりたいと仲間が増えクラス全体での取り組みになり、さらに異年齢の子も巻き込んでいき、約2ヶ月かけて完成させた。以下の6つの事例は園内での活動である。

事例1：2020年12月上旬

カプセルからパラシュートが出るのを覚えていて、紙や布、ネットなどの様々な素材がある中でガラスを包むようなクッション素材の包装紙を選び、ふわっと落ちるように包装紙の大きさを加減し、紐の向きを変え何度も何度も落として実験していた。

事例2：2020年12月上旬

「リュウグウから物質を持って帰ってくるから砂をいれた。」と園庭の砂を袋に詰めていた。砂ではなく、物質という言葉を使って説明していた。

事例3：2020年12月上旬

長い筒がついていて「これはなに？」と聞くと「あれだよ！ サンプラーホーン」と先生は熟知しているよねと相槌を求めるまなざしを向けられた。

考察

子どもたちは大人の想像をはるかに超え、製作に没頭していた。ただ形を作るのではなく、落ちるための素材はどんなものなのか考えこだわって決め、どうやったらイメージ通りに動くのか考え、何度も実験し学びながら着地点を見つけて作っていた。観点も大人より細かく、子どもから多くを学ばせてもらった。保育者が「これがいいのではないかと提案せず良かったと改めて感じた。子どものつぶやきや同じことを繰り返しおこなう過程に目を向けることで、実験や研究を重ねることがよくわかった。今回の事例では職員も保護者へも「保育の見える化」としてその過程を掲示した。完成したことだけ

ではなく試行錯誤の様子をありのままに伝えるようにした。

事例4：2020年12月～2021年1月

Fの様子を見ていた4歳児のGが自分も〈はやぶさ2〉を作りたいといい始めたことから別のものを作ることになった。そっちも手伝ってあげようかと両方掛け持ちで製作するようになったH。

事例5：2020年12月～2021年1月

2歳児のIが5歳児の製作の様子をじっと見つめ「自分も作りたい」と言う。「いいよ」と言われると見様見真似で同じように糊を付けて貼っていた。

事例6：2020年12月～2021年1月

毎日、ずっと様子を見ていたJは最後の完成間際になり「作りたい、入れて」と声をかけ仲間入り。その日に完成すると「ここ頑張ったよね」Fも「手伝ってくれてありがとう」と互いに満足そうだった。

考察

一人の子から始まった〈はやぶさ2〉作りだったが完成するまでに多くの子が参加していた。興味がない子や〈はやぶさ2〉を知らなかった下の学年も日々クラスの隅で、製作活動しているFを見ていて、そこから興味を持ち始めた。はじめから最後まで製作していた子、地道な作業だけ参加する子、アイデアを出して核の部分を作る子、周りの様子を見て興味を持ち参加する子、年下クラスの子など形は様々だったがクラス全員で地道に協力して作り上げた。集中して毎日取り組む姿は「自分もやってみたい」とまわりの子どもたちに思わせるものだった。

(2) わたつみの旗作り

事例1 園内での活動：2021年1月

5歳児のクラス名は『わたつみ』。その旗を作りたいとJ。『わたつみ』の由来が海の神様と知る。「神様ってことは空だから星だね」とそこから〈はやぶさ2〉と星座が繋がりオリジナルの旗を考案し縫って旗を完成させた（写真4）。



写真4 クラスの旗

考察

海の神様と聞いて海のような旗を作るのかと思ったが神様と言う言葉から空、星、宇宙と連想していった。別の活動をしていても常に心の奥には宇宙が存在しているのだと感じた。

4. 探究心の深まり、そして研究は続く…

〈はやぶさ2〉作りを真剣に取り組んでいる子どもたちに本拠地、JAXAで本物を見せたいと思うようになる。自分で考えて行動し責任を持ち、乗り越える努力をし、自分自身の考えをまとめて伝えられるように育てている子どもたちの研究はさらに続いた。

事例1 JAXAでの活動：2021年1月

JAXAには、模型やエンジンの細かい歴史や、研究の様子がわかる動画などいろんな形で展示されていた（写真5）。JAXAの〈はやぶさ2〉は金色でピカピカに光って簡単に作られたように見えたのか「これ、パッパッといい加減に作ったんだよ」と言う子もいた。子どもたちが製作した〈はやぶさ2〉の本体は銀色に見え、とても苦労して作っていた。そして、〈はやぶさ2〉の打ち上げが無事に成功し研究者達が喜びあう動画を見て「ぼくたちもはやぶさの研究者だもんね」と誇らしげに呟く子もいた。さらに興味は深まり、「中はどうなっているのか」「どうやって動いているのか」という疑問が生まれた。



写真5 JAXA見学の様子

考察

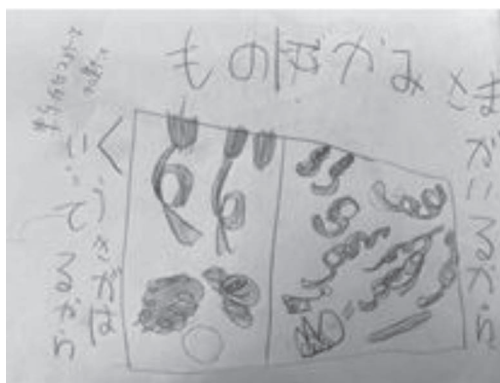
JAXAでも〈はやぶさ2〉の内部がわからないことでさらに探究心が深まった。子どもたちは模型を作っていたのではなく、誇りを持って製作する研究者、技術者だと思いながら取り組んでいたのだと気付かされた。これは忍耐強く探究し続けた子どもたちだからこそ出た言葉ではないかと実感した。

事例2 園内での活動：2021年3月

〈はやぶさ2〉の内部をグループで考えてみることにした。グループ1は「エンジンで飛んでいるのではない?」「エンジンって何?」「爆発させて動くものだ」と自分たちで疑問を解決しながら話していた。グループ2は「人間が入っているんじゃない?」「これは人が入らないやつだった」「誰もいなかったらどうやって動いているの?」「物には神様が住んでいるらしいから神様じゃない?」「神様が吸うための空気が入っているんだ」と日々の知識も交えていた。



グループ1が書いた絵



グループ2が書いた絵

考察

博物館でははやぶさの模型、JAXAでの〈はやぶさ2〉に関する内容の数々や日々の生活の経験、そしてリュウグウから粒子を持って帰還したことなどの知識から、内部がどうなっているかの議論が始まった。設計図も理由もすべてなるほどと感心するものばかりだった。このことから相手の意見を否定するのではなく、必要なものを選別し順序だてて考え、比較しながら意見をまとめて言うことができ、その成長は目を見張るものだった。

5. 様々な角度から探究する

子どもたちは自分で学び取る力がついていた。「物事はいろんな視点で見ることが面白い」とさらに感じてもらうため、いろんな角度から宇宙を感じることができな

いかと考えるようになった。

事例1 園内での活動：2021年2月上旬

野口聡一さんが国際宇宙ステーションに滞在。2021年2月野口さんが更新している宇宙ステーションの様子や実験の様子の動画をみた。ぶかぶか浮いている野口さんよりも、水を宙に浮かせたら丸く浮いている様子を見て「え～どうなってるの?」「コーラ飲んだらどうなるのかな?」「やってみたい!」といういろんな意見が出て、コーラ実験ではどうなるか想像し結果を考えていた。グループ1は「シュワシュワになる」グループ2は「ぐちゃぐちゃになって中に茶色いシャボン玉みたいな球が出来る」と推測。

考察

人がふわふわ浮いている無重力に興味を持つかと予想したが、身近なものが形を変えて浮いていることに興味津々。「なぜ?」と問い、宇宙に自分が行って実験したらどうなるか。結果まで考え、わくわくして楽しんでいるようだった。小さな「なぜ」という疑問は、地球と宇宙での物の在り方の違いという深い疑問に結びついて、それに自ら気づき、比較をして協同的に考えられるようになっていた。

事例2 園外（神社）での活動：2021年3月上旬

〈はやぶさ〉を特集していた番組を見つけ鑑賞した。〈はやぶさ2〉だけではなく〈はやぶさ1〉が宇宙で迷子になったときに祈願した神社が地元にあると知った。「そんなところがあるの?行ってみたい」と早速出かけた。神社には鳥居が幾つもあり「はやぶさ神社（本殿）はあれじゃない?」と、はやる気持ちが抑えられない様子。絵馬に鳥居と〈はやぶさ2〉が描かれ「これすごい、お願い描くのには（絵馬）はやぶさがある。やっぱり特別な神社だね。」と大興奮。参拝は身が引き締まるようで神妙な面持ちで頭を下げていた。

考察

園全体でも宇宙へのアンテナが張り巡らされており、特集があったと他の職員が情報をくれた。卒園近く忙しかったが見るだけでなく地元なら、実際に見に行くことにした。神社を探しながら歩き、片道40分かけて神社に到着。〈はやぶさ〉の開発者も神に祈った神社、同じ場所に足を踏み入れたと、嬉しくも緊張する様子を見ることが出来た。お願いは「〈はやぶさ2〉が新しい旅でも頑張ってもらえるように」と開発者と同じ気持ちになっているのだと思った。鳥居が好きで、手作り図鑑を作っていた数人が鳥居と見比べて名前を調べていた。さらに神社や鳥居という新しいものに興味を持ち始めた神社めぐりだった。

6. 探究の協同性、創造性

保育室を真っ暗にしてプラネタリウムが出来あがった（写真6）。完成した〈はやぶさ2〉をそのプラネタリウムの夜空に浮かばせた。それを多くの人たちに見せたいという思いが宇宙パークという形になった。また折り紙で自作の〈はやぶさ折り〉を開発した。以下の2つの事例は園内での活動である。

事例1：2021年2月上旬

ここに〈はやぶさ2〉を浮かばせたい『宇宙パーク』にしようと思いついた（写真7）。博物館のプラネタリウムを見ていたので「やじるしくん（星座を教える光る矢印マーク）が必要だよ」「音楽もあったから流そうよ」「どんな音楽がいいかな?ビバルディの四季にしない?」「星座の歌作ったらどうかな?」「解説あったよね」「惑星は大発見したこと話そう」「星座はお話（神話）」「はやぶさは、部位の説明が必要だよね」

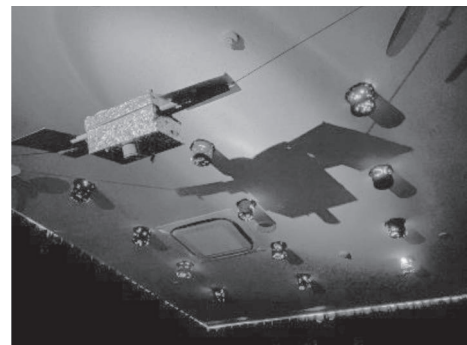


写真6 はやぶさ2・プラネタリウム



写真7 宇宙パーク全体図

考察

根気強く続いた活動は自分たちの自信に繋がった。そこから「みんなで作り上げたい」との強い気持ちが育っていった。それぞれ違った力が組み合わせさり一つの力になった瞬間だった。

事例2：2021年3月上旬

〈はやぶさ2〉を折り紙で折ってみようと、折り始めた。

一人の子のアイデアから別の子がさらに良くなるようアイデアを出し折り方を考案。それを周りの子に伝え一緒に折っていた。

考察

ただ折り紙を切って貼っていくのかと思ったが、工夫しながら折り重ねて作っているのに驚いた。今までの経験から、創造力を働かせながら、よくするためにはどうしたらいいかを自然と話し合う環境が出来ていた。出来上がった折り紙の〈はやぶさ2〉は後々、JAXAや博物館の方々へお礼の手紙にプレゼントとして同封できた。

7. 専門家との出会い

自分たちが作った〈はやぶさ2〉を尊敬する人たちに見て欲しいと子ども達から要望があった。誰かと聞くとお世話になった博物館の方々、JAXAの方、そして2020年（当時）に宇宙にいた野口さんを選び、招待状を自分たちで書いて送った（写真8）。博物館の方々は快く子どもたちの〈はやぶさ2〉を見に来て下さった。JAXAの方々は本物の〈はやぶさ2〉が地球に帰還したばかりで大忙しの為、来られなかった。卒園する前に何とか子どもたちの想いを叶えられないかお願いをした。するとオンライン交流の機会を設けて頂けることになった。イオンエンジンを開発された細田聡史（〈はやぶさ2〉の運転手）さんが代表でお話をして下さいになった。

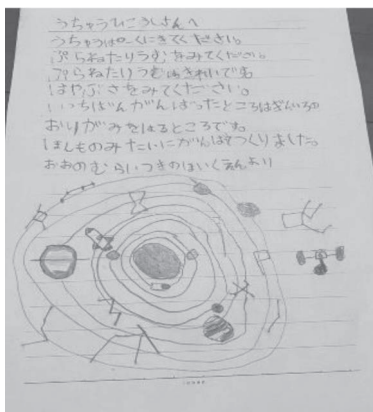


写真8 招待状

事例1 園内での活動：2021年3月上旬

実際に開発者の人と話せることを保育者から聞いた子どもたちは「夢がかなった〜!!」と大喜びだった。「エンジンはどれくらい熱いの?」「サンプラーホーンはなぜ長いの?」「なんで金色しているの?」と新たに専門的な疑問が生まれた。職員も保護者にも声をかけ参加して、保育園のホールに集まり念願のオンライン交流会が始まった。スクリーンの最前列の子どもたちは知りたい思いのまま、同じ開発者として次々と質問していた（写真9）。



写真9 オンライン交流の様子

考察

子どもたちの熱い想いをかなえる為、新しいパソコンを購入し、ホールで携帯電話の電波を使うなど急遽ネット環境などを準備した。JAXAの細田さんが打ち合わせの時に「子どもたちの本気が伝わってきているのでこっちは本気でやります」と言って下さり、質問にも丁寧に敬意を払ってくれながら答えてくださったのが印象的だった。職員のみならずプロも動かしていった子どもたちの探究心（遊び、学び）は常に真剣なものだったと思う。

事例2 園内での活動：2021年3月上旬

〈はやぶさ2〉の内部が黒色で3つの部屋に分かれていると教えていただいた。オンライン交流会後、完成した〈はやぶさ2〉を作り直したいとFが言った。内部が3つの部屋になっているとわかったので作り直し、色を塗り直していた（写真10、11）。



写真10 改良前

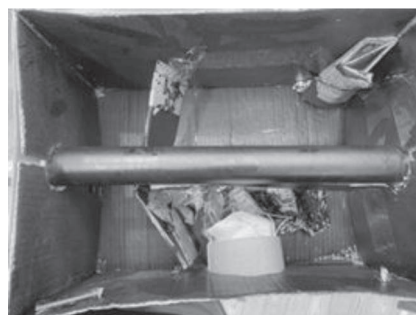


写真11 改良後

考察

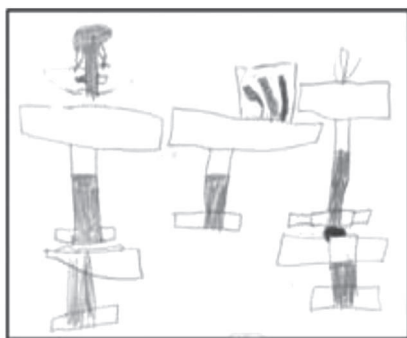
大人にとって「間違い」と思えることもFは否定的にとらえず「次へのステップ」だと自分で気づき、訂正することで完成形に近づいたと喜んでいて、その受け止め方や率直さに驚くと共に生きる上で何より大切なとらえ方だと気付かされた。

事例3 博物館と園内での活動について：2021年3月中旬

博物館で行われた〈はやぶさ2〉のカプセル展示を見に行った。事前に宇宙で旅したカプセルはどんな形で帰ってくるかとの投げかけに「黒くなっていると思う」「割れていると思う」と言いながら絵に描いた。初のカプセルを食い入るようにじっと見つめ「あそこに傷がある」「すごかったんだね」と時間をかけて目に焼き付けていた。帰ってくると丁寧に絵を細部まで描き、横から書いている子、全方面から書いている子など様々に表現していた。



見る前の絵



見た後の絵

考察

子どもの想いに動かされ、大人も宇宙へ興味が深まった一年。世界初公開の展示会の情報が届き、どうしても見せたい思いで抽選はがきを何枚も何枚も書いて投函。無理かもしれないと覚悟していたが当選。届いたはがきでクラスのみんなが見られると分かった時は職員で泣いた。「はやぶさ神社、前にいったから当たったんだね」と子どもの声。思いを一つ一つ叶えていく嬉しさ、興奮、さらなる探求心を同じ気持ちで分かち合えるこの職業のすばらしさを改めて感じた。

8. 総合考察

子どもの興味から始まった宇宙プロジェクトは、4歳児の星座から始まり、惑星、〈はやぶさ2〉、そこから科学の好奇心へと広がった。〈はやぶさ2〉製作に至っては終わることはなく、卒園する最後の日まで物質の重さを計り探究しつづけていた。

この子どもの熱意が今回、多くの大人を動かした。はじめは子どもと担任だけだった輪が園全体へと広がり、保護者、博物館の方、JAXAの方、開発者の方へとより専門性深く広がっていったと考える。

もともと好奇心旺盛なクラスだったがこんな風に広がりを見せたことが面白かった。興味の持ち方、感じ方の違い、着眼点、考えなど子どもの沸きあがりつづける探究心を目の当たりにし、その無限大の可能性をそばでみることが出来て本当に嬉しかった。コロナ禍であったが日々の保育が充実し面白いと実感できたのも子どもたちのおかげである。また、園全体のプロジェクトのように広がり、全職員がチームプレーをしながら子どもたちのやりたい気持ちを大切に支えてくれたおかげでもある。

宇宙プロジェクトの取り組みを通して常に子どもたちは「遊び、学び」が隣り合わせの「探究」をし続けており「自分で選択」「主体的に関わる」「推測」「試す」の繰り返しの連続だったのではないか。終わりなく、繰り返していく中で自分の良さに気づき、育くんで、自分が大好きになっていった。また、自分を大切にできると、相手の個性を認めることができ、協同することも自然な姿となっていった。これは今後の人生の基盤となりとても大切なことだと思う。この乳幼児期にこういった経験がどれだけできるか。保育者は、その大切な時期に携わっている。子どものやりたい気持ち＝探究心を見守り、声に耳を傾け一人ひとりに寄り添っていく保育を今後もしていきたい。

《参考文献》

- ・相良 敦子 (1985) 『ママ、ひとりですの手伝ってね』

評者：天野 珠路

「宇宙」をテーマに、子どもの興味・関心を膨らませ、発見の喜びや表現することの面白さを探求した実践記録です。保育者がリードしながらは（やぶさ）の帰還や地域の博物館での活動など、様々な機会や場を活かして子どもの体験の幅を広げています。JAXAに出向いての体験学習は、この先ずっと子どもたちの心に残ることでしょう。

園の理念やビジョンが明確であり、「総合学習」としての保育を目指し、「実験」や「研究」といった視点での取り組みもあります。子どもたちの「探究」は一生続くものであり、大人が「探究しやすい」環境を作ってあげるだけではないベクトルが無数に多方向に伸びていくのだと思います。一人ひとりの子どもや保育者の得意なこと、好きなことを活かしながら楽しい保育実践を重ねていただきたいと願っています。

評者：田和 由里子

遊びが学びであることから、0歳児からの「探求心」に着目しての実践研究でした。

「主体的に研究」できるようにと環境構成も工夫されていました。今回は、近隣にある公共施設のプラネタリウム鑑賞から「宇宙プロジェクト」へ発展させていました。子どもたちの言葉を取り上げながらの研究でもありましたが、大人の手助けもかなりあったように感じられました。

しかし、レポートのまとめ方が良くできており読みやすかった。今後も各年齢へも活動が広がって園を挙げてのプロジェクトに発展できることを願います。

評者：馬場 耕一郎

JAXAと博物館という地域の資源を最大限に活用した、大変興味深い研究でした。子ども達の星や宇宙に関する興味を、実体験で叶える取り組みは大変良い取り組みでした。発見する面白さに出会える経験を提供している保育内容は、大変素晴らしいと思います。また、5歳児の姿を見て2歳児が自分も作りたいという気持ちになる園の環境は良い刺激が好循環していると感じました。卒園児がJAXAで勤務することを楽しみにしています。

課題研究② 遊びと学び 子どもの主体性から生まれた遊び ～日常の延長上に運動会を捉える～

富山県・幼保連携型認定こども園 西田地方保育園 鍋谷 須美子

1. 研究の背景

引継ぎ期間であった2019年度の保育は、安全を確保することを優先とし、室内では自分のクラスのみで遊ぶことがほとんどだった。園庭は、事前に保育者が環境設定しないと遊べないという理由から、戸外活動は散歩が多く、園庭で遊ぶことは少なかった。地域の方からは、「子ども達の声あまり聞こえない」「日中子どもの姿をほとんど見ない」という声も聞かれた。移管された2020年度からは、環境に自らかかわり、自主的、主体的に活動する元気な子どもを育てることを目標とした保育の中で、まずは、園庭にタイヤや丸太、机や椅子などの可動式遊具を取り入れ、園庭で遊ぶ楽しさを感じられるよう、園庭改革に取り組んでいる。室内は、自ら好きな場所、好きな遊び、好きな人を選んで遊ぶことができる環境にするため、活動の種類ごとにゾーン化を試みた。子ども達が自ら人や物、空間などに働きかけることによって、何かを感じたり、学んだりできる環境構成を考えた指導計画を立て、実践している。

行事は、移管前の2019年度まで保育者主導で進められており、運動会の内容については、練習が必要な鼓笛隊や競技が主だった。そのため、日常的に子ども自身が自分で選ぶ遊びの時間と場所を確保できるよう、2020年度から保育を徐々に変化させ、行事の見直しも図ってきた。

2. 研究の目的

本稿では、行事を特別なものと考えず、日常の遊びが運動会へとつながっていった過程を考察し、子どもが主体的に遊ぶ中で、どのようなことを学んでいったかを明らかにしたいと考える。

3. 子どもの姿

当園は、異年齢（3歳児40名、4歳児40名、5歳児49名）が同じフロア内のゾーン化した保育室で共に活動している。すぐ側で異年齢の存在を感じられることから、4歳児クラスの子供達は5歳児に憧れの眼差しを持ち、自分達もいつかやってみたいと思いを寄せている。3歳児には、5歳児が優しく声をかけている姿を見ていることにより、真似をしながら自分達ができることを行動へと移し、思いやりの気持ちや、自分もできるという自信が持てるようになってきている。4歳児クラスの子供達は夏頃から、徐々に友達を意識し始め、好きな友達を誘い合ったり、一緒に生活したりすることが喜びに

つながってきている。なお、本稿に掲載した写真は、保護者に承諾を得ている。

4. 遊びから運動会の種目への発展【コロコロドミノ】

ここでは、「コロコロドミノ」という日頃の遊びが運動会の種目に発展していった事例を紹介する。なお、事例ごとに掲載したA児、B児、C児は、それぞれ別の子どもである。

まず、コロコロドミノとはどういうものか説明しておきたい。コロコロドミノとは、木製の板や積み木をつなげたコースを自由自在に作り、直径3cm程度の木の球を転がして遊ぶ玩具のことである。【写真1】



写真1：ゾーンでコロコロドミノ遊び

(1) 好きな遊びの時間での様子〈8月27日〉

廊下の一角にある人気のコロコロドミノゾーンでは、6月頃から4歳児がいろいろなコース作りをして遊びが盛り上がっていた。角度を急にしたコースや、板を何枚もつなげ、とにかく長くしたコース、いくつものトンネルの板を建てたコースなどがあつた。また、自分のイメージしたコースを作るため、片付け用のコンテナもコースの一部として子ども達は遊びに取り入れていった。その後、積み木を組み合わせた階段のコースも作り、発展していった。【写真2】

〈考察〉

進級して2カ月したこの頃から、自分のしたいことを見つけ、5歳児の遊ぶ様子に興味関心を持ち、自分なりに試してみようとする態度が育ってきていると思われる。また、子ども達は同じ空間や、一緒に同じもので遊ぶことで友達からの刺激も受け、新しい遊び方を見つける面白さや喜びを感じていたと考える。

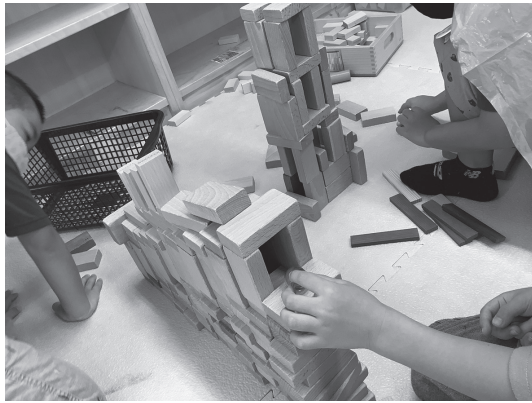


写真2：積み木で階段を作ったコース

(2) 遊戯室での大きいコロコロドミノ作り1回目(4グループごと)〈9月1日〉

子ども達の大好きなコロコロドミノ遊びは、更にもっとすごい物を作ろうという挑戦へと発展していった。筆者は、子どもが壁に板を張り付けてコースを作っていたのを見て、もっと広いスペースが必要なのではないかと考え、遊戯室で大きな道具を使ってコロコロドミノを作る活動をクラス全体に提案をした。【写真3】



写真3：壁に板をはりつけるコースを考えた子どもの姿

まずは、クラスみんなが好きな友達とグループ別になって、コロコロドミノを一つずつ作ることに、筆者が準備した遊戯室にある材料・道具(ひな壇、巧技台、ふみきり板、すべり台の板、大きな組み立てブロック、ウレタンブロック、バケツ)を使って作ることを条件として掲げてみた。

今回は、初めて4グループに分かれ、この活動で子ども自身が何を感じ、どのように材料や友達と向き合うかをねらいにして、子ども達の力で課題に取り組めるようにした。筆者は、それぞれのグループが作ったコロコロドミノの工夫した点を見つけ、一つずつ紹介する時間

を作り、自分以外のグループのコースでも遊べるようにした。【写真4】



写真4：遊戯室でコロコロドミノ遊び1回目

上手くコースとして成立したグループでは、「ゴールまでいったー!」と歓喜の声が上がった。一方で、何度ボールを転がしても上手くいかないグループでは、疑問の声ばかりが上がった。

【A児】「なにこれ?ボールまっすぐ進まんわ」

【B児】「すぐボール落ちるんだけど…」

【B児】「なんでー?」

この上手くいかないことに疑問を感じ、「なぜだろう」と考える子もいた。

他のグループでは、「〇〇ちゃん、そっち持って」と、お互い声をかけ合い協力して材料を運ぶ姿が見られたり、まだ完成してないのに、ボールを早く転がしたいばかりに先に転がし、「〇〇君、まだボール転がさんで」と、トラブルが発生したりした。しかし、初めての大きなコロコロドミノ作りは、子ども達にとって魅力的な活動となり、口々に「またしたい!」と話していた。

〈考察〉

子ども達はこれまでの経験から、板を斜めにして組み合わせるとボールが転がることは分かっていた。また、この時はゴールをバケツにしていたグループが多かった。しっかり終わりが分かるからだろう。それぞれのグループでコースの形は似ている所はあるものの、長さは全く違ってしたが、それぞれを比べることはなかった。

このことから、物と物を組み合わせ、工夫することの楽しみは感じられたようだった。イメージしたものを何とか実現しようとする姿から、友達と協力する学びができていられる。また、今回は、なぜ?という疑問は出るものの、その疑問を解決しようとする試行錯誤を行う段階まではいかなかったが、自ら考えるきっかけになったのではないかと考える。

(3) 遊戯室でのコースづくりの工夫2回目〈9月3日〉

子ども達に用意した材料・道具は前回と同様。加えて、コース作りで足りないものは、保育ゾーンから持ってきて

でも良いこととした。

また、筆者は、「好きな友達とグループになってやってみよう」と声をかけたが、子ども達は前回とほぼ同じメンバーを呼び合って、グループを作った。

A児「ボールが（コースから落ちずに）まっすぐ進むために本を立てようよ！」

B児「あー、それいいねー。俺も手伝うよ！」

絵本ゾーンから、グループ数人で絵本を運び始めた。筆者が、出来上がっていく様子を「なるほど！ボールがコースから落ちずに真っすぐ進むように、本を立てて壁を作ったんだね」と声をかけると、その言葉を聞いて他グループでも壁作りへの試行錯誤が繰り広げられた。【写真5】



写真5：本を壁にしたコース

〈考察〉

2回目は、前回経験したことで、イメージが広がりやすかった。本を持ってきた以外のグループでは、使いたい材料・道具が明確になってきた子もおり、材料・道具の取り合いが起きた。これは、子どもがコロコロドミノに対するイメージがはっきりしてきたからだと考える。また、今回筆者は、自分達で足りない物を何で補うか、どのような素材を選ぶかを子ども達自身が考えることをねらっていた。本を広げて立てると壁になるかもしれない、と自分なりに考え、思いついたことを試してみること、考えよう、工夫しようとする気持ちが育ってきていると考える。この活動で、コロコロドミノの改良点に気づき、「やってみよう」とするグループ活動の面白さと材料を見つける楽しさを感じていたようだ。

(4) 長くてボールが落ちないコース作り3回目〈9月6日〉

この頃になると筆者は、同じような条件を作って競い合えたらいいなという思いを持っていた。子ども達はイメージがはっきりしてきたようで、活動を楽しみにし、家から段ボールや空き箱を持ってくるようになった。遊戯室でのコロコロドミノ遊び3回目は、4つのグループそれぞれが充実して遊べるよう、筆者は意図的に条件を統一できるような提案をした。まずは、クラスみんなで作りたいもののイメージを共有することから始めた。子ども達からは、①長いコースにしたい②ボールが落ちないよう壁のある真っすぐなコースにしたいとの2点の意見が出た。ボールが落ちない壁を作るには、段ボール、本、

広告紙や新聞紙、かご、積み木など材料が必要だという意見から、これらを子ども達が用意できるよう、環境構成に加えた。また、筆者は、事前に新聞紙を輪にした物をボール置きにして、新聞紙や広告紙が壁としても活用できるというヒントをさりげなく環境の中に入れた。

長いコースにすると、今まで以上にグループ内で材料の確保が必要になってくる。早く動いたグループは、材料の調達には有利になった。出遅れたグループでは、以下のようなやり取りがあった。

A児「あー、壁作るものない。どうしよう…」

B児「先生、材料なくなった。」

保「ここにある新聞とかはどう？たくさんあるけど。」

B児「どうやって？」

保「ボールのせてあるもの見てきて。」

B児「これ？」

C児「わかった！ここに、こんなん（このように）してくっつけたら？」

B児「あーそれいいねー」

このグループは筆者のヒントから、新聞紙や広告紙をコースの壁としてテープで貼り、ボールが落ちないコース作りに成功した。【写真6】



写真6：広告紙を壁にしたコース

このあと筆者は、グループ同士で競い合う楽しさを感じてほしいという思いから、意図的にボールが転がるタイムを計ったと同時に、コースの長さを測定した。

まずは、子ども達の長くて落ちないコースづくりの願いを認めるために、長さを測定した。次に、角度が変わったら、コースの長さや高さが変わるという体験を通して、速さの変化に気づけるよう、タイムを計った。

〈考察〉

工夫次第で身近な物が活用できることを知らせたことにより、そこから自分で考え、試してみようという探求心が生まれたと思われる。子ども達自身が気づき、実際に使ってみる経験から、広告紙がコースの壁になるという、新たな発見につながっていったと考える。また、そこには長いコースにしたい、ボールが落ちないようにし

たいという友達同士の共通の思いや目的があり、それに向かって協力しようとする活動につながっていることが考えられる。

(5) 外で作りたい！〈9月10日〉

運動会のプログラムを考えていた時のこと。クラス全体で昨年の運動会を思い出し、今年はどんな運動会にしたいかと、子ども達と話し合っていた。当園の運動会は、昨年度のコロナの影響から学年ごとに園庭で開催することにしている。日頃から5歳児に憧れを持つ4歳児も、今年の運動会は自分達で考えたいという積極的な意見が出た。話し合いの最中、いつも新しいことを考え提案するA児が突然、「外でもっと大きなコロコロドミノを作りたい！」と言い出した。他児が、「そしたら今作っているでっかいコロコロドミノをお母さんに見せられる！」という他の子ども達の思いも膨らみ、プログラムの中に入れることになった。筆者は、どうしたら勝負(競技)につながるかを子ども達に提案した。その結果、グループで競うコロコロドミノのルールは、①長さを4つのグループ全て5メートルにする。(園庭に出て、実際に長い紐を置いて長さを実感して決めた)②ボールが早くゴールについたグループの勝利にする、の2点になった。【写真7】

(6) 運動会のためのグループ再編成〈9月13日〉

運動会に向け、4つの新たなグループを好きな友達同士で構成し、それを固定化して、コロコロドミノを作ることにした。この時期遊びを共有する友達が徐々に固まりつつあり、友達と活動する楽しさを感じてきている一



写真7：コースの長さを決める

方で、自己主張のぶつかり合いや、自分の思いをため込んでいる子もいる。筆者は、この活動からいろいろな友達と関わりを持ち、一緒に協力して活動する楽しさを感じてほしいと思っていた。この頃は、まださほど強い仲間意識が芽生えてないのか、思いのほかグループ決めはスムーズだった。

いよいよ新しいグループで運動会当日に競うコロコロドミノのコースを作ることになる。4グループそれぞれの特徴は、【表1】の通りである。

〈考察〉

情緒面の育つ過程の違いから一人ひとりの活動への取り組み方にも違いが見られ、子ども達は、グループで取り組む難しさ面白さも感じていたようだった。毎回変化しては、発展していく活動に、仲間意識が育ってきたと考える。

表1：4グループの人間関係の特徴

あかグループ	なかよしグループ	しんかんせんグループ	ころがすいっちグループ
<ul style="list-style-type: none"> ・友達の考えを理解するまでに、時間がかかる。 ・個々の理解力・技術・興味の差が大きく、全員でコースを作っている時に、集中力が欠ける。 ・保育者が子ども達に役割を促すことが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の意見をよく聞き、お互いに協力する。 ・リーダー格がグループを引っ張り、展開が早い。 ・それぞれに行動力がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見の出し合いが多く、友達を認め合う。 ・抜群のチームワーク。 ・トラブルがほぼない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の姿を見て、一人ひとり周りを見ながら黙々と取り組む子が多い。 ・保育者が側につくことで安心して意見が言える子が多い。 ・それぞれが協力し合い、協調性が強い。

(7) ころがすいっちグループのコロコロドミノ〈9月14日〉

A児を中心にコースの組み立てをしている、ころがすいっちグループは悩んでいた。【写真8】上に積み上げた段ボールがバランスをとれず何度も崩れるからだ。



写真8：ころがすいっちグループのコース作り

A児 「(段ボールの中) 重くしたら？」

B児 「中に何かいれる？積み木？」

保 「積み木か！やってみたら？」

C児 「とってくるわ！」

段ボールに入れるものは、積み木→ウレタン積み木→絵本→図鑑と何度も友達同士で試行錯誤しながら変化していった。

〈考察〉

筆者は、一人ひとりの思いをつなげようと声をかけたり、見守ったりした。A児の気づきから、他児も重さに焦点をあて、重く安定したものは何かを考えるきっかけとなった。

この頃からそれぞれのグループに、担当の保育者をつけることにした。その後3回の練習試合をする機会があったが、毎回コースを組み立てるため、傾斜の角度が違ったり、ボールに勢いがありすぎて壁があっても落ちていったりする様子が見られた。その度に、子ども達は、グループの友達と一緒に協力をしながら完成させていった。そんな中で、運動会当日を迎えた。

(8) “負けるなコロコロドミノ競争”(運動会当日の10月8日)

晴天となった運動会当日は、自分達でコロコロドミノの材料を運ぶ様子や、装置の設営も見せ場とした。友達と声をかけあう姿や力を合わせて運んでいる姿、集中して組み立てる姿を保護者にも見てほしいという筆者の思いがあったからだ。装置が出来上がってからも、速さを競う戦いである。結果は今まで一位になったことがない、「ころがすいっちグループ」の勝利となり、保育者と共に歓声を上げ喜び、他のグループもそれを拍手で称えた。

【表2、写真9】

表2：運動会当日の4グループの特徴

	あかグループ	なかよしグループ	しんかんせんグループ	ころがすいっちグループ
材料	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボール ・ふみきり版 ・巧技台 ・ひな壇 ・空き箱 ・牛乳パック ・バケツ ・新聞 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボール ・ふみきり板 ・巧技台 ・すべり台 ・組み立てブロック 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボール ・巧技台 ・ひな壇 ・組み立てブロック ・空き箱 ・牛乳パック ・バケツ ・新聞 ・ラップの芯 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボール ・ふみきり板 ・巧技台 ・すべり台 ・空き箱 ・牛乳パック ・バケツ ・新聞 ・図鑑
使い方の空間	<ul style="list-style-type: none"> ・スタート地点の高さ約130cm。 ・コースの最後まで一定の傾斜。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタート地点の高さ約120cm。 ・コースの半分まで傾斜だが、その後水平。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタート地点の高さ約110cm。 ・コースの1/3まで傾斜だが、その後水平。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタート地点の高さ約140cm。 ・スタート直後の急な傾斜を経て、その後一定の傾斜。
コース全景				



写真9：運動会当日の負けるなコロコロドミノ競技

〈考察〉

4グループ全てが、全試合を通じてそれぞれ一位になったという偶然が引き起こした結果は、子ども達一人ひとりの頑張ってきた思いを叶えてくれた。ボールが速く転がってゴールしてほしいという同じ目的に向かって、イメージを共有すること、何度も問題にぶつかり、それを乗り越えるために試行錯誤を繰り返すこと、すなわち、勝つためには、物の性質や仕組みを捉えることと、友達同士で協力することが必須条件であることを、子ども達自身が経験から学んだと考える。

(9) 子どもの学びを保護者に伝える

運動会の1か月程前に、子ども達の中から「今作っているでっかいコロコロドミノをお母さんに見せたい」という声が聞かれてから、筆者は子ども達の姿を保護者に伝えていきたいと考え、今回のコロコロドミノ遊びの経過や運動会当日までの過程を、クラスだよりやホームページを通して丁寧に伝えた。【図1】

この頃はコロナ禍でもあり、保護者が普通の保育を見る機会が減り、保育理解を深める手立てを模索していた時期でもあった。

子ども達が一つの目的に向かい、試行錯誤しながら取り組んでいる姿や友達と協力している姿などを、写真と子ども達の会話や思いを入れ込み、運動会までの経過を随時知らせた。発刊する度に保護者からは、「クラスだよりを読むのが楽しみにになりました。」「家でコロコロドミノの話を嬉しそうに話してくれ、状況が目浮かびます。」「毎日楽しく過ごしているんだなぁと本当に嬉しく、子どもの気持ち次第でこんなにも親の気持ちが左右されるのだと実感する毎日です。」などという意見を連絡帳や口頭で知ることが出来た。

また、運動会後の保護者の感想には、「コロコロドミノの設営で、他の友達と協力して運んでいて成長を感じました。」「友達と協力して作り上げる、やり遂げるといった大きな成長を見られて感動しました。」「帰ってきてからもコロコロドミノの説明を一生懸命してくれました。」「子ども達の積極的な姿勢や、それをサポートして子ども達のやりたいようにやらせて下さる先生方の方針にとっても感動しました。」などとあった。

口頭だけでは伝わりづらいことや、イメージしにくいことを写真と共に伝えることで、リアルな日常を保護者に知らせることが出来たのではないかと。クラスだよりの発刊は、親子の会話を増やすコミュニケーションツールにもなると感じた。頻繁に発刊することで活動経過が分かり、次号を読む楽しみとなったと同時に、親子で園での活動が共有できることにもつながった。

運動会はこうあるべきという概念がある保護者もいた

Bクラス
運動会プロジェクト
発動中!!

Bクラスだより No.4 ~Bクラスの野望がつかかたちに...!~

P3.9.27
西田地方保育園

Bクラスの次の野望【外でっかいコロコロドミノを作ろう!】が、スタートしました。作る、そして共に戦うグループメンバーが決定!10人ずつの枠になり、グループ名も決まりました。どの材料を使っているのは自分達次第。子ども達が自行練習しながら、作ったコロコロドミノ、出来上がるまでボールを転がして試す。失敗したら原因を探し改善する。そして成功したらみんなが大笑い!そのような過程を繰り返し、今は子ども達同士、グループの絆が深まってきています。コロコロドミノの全貌は、運動会当日までしばらくお待ちください!段ボールや空き箱の口協力、ありがとうございます!

グループで考えるコロコロドミノ

あかグループ

この上にのせるぞー!

ここにっつなげたいね

アイディア満載!色んな発想が飛び出します。

急な披露にしようよ!

なかよしグループ

すごい重さ!各発掘!友達と協力して作りこみました。

しんかんせんグループ

コロカスイチグループ

重くするために回転させてみよう!

コロコロドミノの長さ?

どのくらいの長さのコロコロドミノを作ろうか?実際に園庭に行き、ひもを使って長さを確認。

この3つのテブの中だ、どの長さがいいかな?

こっちの長いのがいい!

結みにしてみよう。

みんなで決めた長さは...5メートルに決定!!

コロコロドミノのルール?

① 5メートルの長さの装置を作る
② ボールが早くゴールしたグループの勝ち

—Bクラス生活発表会日程追加のお知らせ—

以前お知らせした日程に不都合な方がおられましたので、追加日を設けます。生活発表会実施日→12/9(木)、12/10(金)お子さんは両日参加します。保護者の方は、どちらか都合の良い日を選択してお越しください。出欠票に関しては、後日お知らせを配布致します。

図1：クラスだより

が、運動会を心待ちにして楽しそうに話す子どもの変化とクラスだよりから、日常の活動があつてこそ、当日の姿があることを理解して頂けた感想が得られたと考える。これらのことより保護者は、運動会に限らず、昨年から保育の改革を進めている日々の保育内容と方法への理解度が高まってきていることを実感した。

5. まとめと今後の課題

本稿は、日常的な遊びから出た子どもの「やってみたい」という思いを、人や物との対話を重ねながら、より大きな思いへと発展し、行事へとつながった過程である。その中で子どもの願いが生み出された。その度に、保育のねらいをたて、援助を行った。その結果、試行錯誤をしながら物の性質や仕組みを理解できたり、グループの友達と一緒に活動すると面白い、楽しい、ということを感じられたり、一緒に活動して考えを出し合うことで共通のイメージがもてたり、友達同士で考え協力することで目的を達成できたりと、多様な学びを得ることができた。保育者は、子どもの興味関心を大切に、「やってみたい」の実現に向けて、楽しく、主体的に子どもが活動できるような環境構成を考えていくことが大事であると改めて実感した。また、事例ごとの子どもの願いが活動への主体性を支えたともいえるだろう。このように、行事を日常保育から切り離すことなく、結び、つなげていくことで、子どもの豊かな学びが保障されたと考える。これこそが、日常の延長上に行事を捉えることではないだろうか。今回の活動を通して、筆者と共に他の保育者も、日常保育の活動から行事を進める充実感や楽しさを体験することができた。

私達保育者は子ども達の可能性を信じ、その力が発揮

できるように援助していくことが大切である。また一人ひとりの心の動きを捉え、その時の様子に応じて、今日のような経験が必要かを考え、状況を作っていくことが子どもの育ちを保障することにつながることを実感した。また、子ども主体の運動会を通して、保護者が子どもを愛おしいと感じ、その成長を共に喜び合える園の雰囲気を作ることで、園への理解にもつながったと考える。

今後も、従来の行事の概念にとらわれず、日常保育の延長上に生活の変化と潤いを感じとれる行事を行ってきたい。また、保護者にも保育の経過を伝えながら、子どもの学びを感じとれるような発信の仕方をしていきたい。そして、4歳児が主体的な遊びを積み重ねることで、5歳児になった時には、子ども達自身が遊びに必要な環境を準備し、友達同士で目的を共有できるようになってほしい。

【参考文献】

- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
- ・大豆生田啓友編著（2017）『倉橋惣三を旅する21世紀型保育の探求』フレーベル館
- ・大豆生田啓友編著（2021）『園行事を「子ども主体」に変える！』チャイルド社
- ・河邊貴子（2017）『遊びを中心とした保育 保育記録から読み解く「援助」と「展開」』萌文書林
- ・加藤繁美（2013）「Ⅱ行事のとらえ方と指導」『0歳～6歳心の育ちと対話する保育の本』学習研究社
- ・高山静子（2017）『学びを支える保育環境づくり』小学館
- ・藤森平司（2011）『見守る保育』学習研究社

講評：子どもの主体性から生まれた学び ～日常の延長上に運動会を捉える～

評者：石川 昭義

移管される前まで保育者主導で行われていたとされる行事（運動会）のあり方を見直し、日常の保育の内容を行事に結びつけた実践例です。背景には、日常的に子ども自らが選び、進んで遊ぶという保育への変化があることが伝わってきます。

「コロコロドミノ」という遊びが、最終的には運動会の種目に発展していったストーリーの中で、子どもがアイデアを出し合い、試行錯誤しながら共同して活動する姿が生き生きと描かれています。子どもながらの「疑問」「気づき」があり、解決に向けた取組なども具体的でわかりやすかったです。保育者の思いを適度な形で子どもに伝え、子どもからの提案を踏まえながら、その都度環境構成を工夫していた対応もよかったです。

途中から各グループに担当の保育者を付けることにしたとの説明がありましたが、そこでの保育者の役割や関わり方を通して、保育者を付ける前と後で子どもの活動についてどのような変化があったかなど、具体的な説明があるとよりわかりやすかったと思います。

評者：田和 由里子

行事を特別なものと考えず、日々の保育の積み重ねと子どもたちの発想で運動会の種目へ発展し行ったことがわかりやすくまとめられていました。事例のところに説明付きの写真があり、子どもたちの楽しそうな表情が手に取るように読み取ることができました。事例ごとに子どもの発言も掲載されていましたが、A児・B児・C児と統一されていたので、別々の標記であれば色々な子どもたちからの意見があったことが認識できたと思います。文中に「筆者」とあったが、担当保育者だと

思われるので表現方法を変えた方が良かったと思います。今後、他の行事の見直しをしていただき実践研究の応募をお待ちしております。

評者：高木 早智子

「コロコロドミノ」が室内での手元の遊びから、遊戯室、園庭へと巨大化していく様子がとても楽しそうに記録されていました。4歳児の「子どもの主体性」や友達関係、個々の成長発達を保育者の視点でとらえ、それを考察している姿勢にも好感を覚えました。

ただ、「子どもの主体性」という内容ですが、保育者の子どもに対する直接的な提案が多いように感じました。例えば、大きな作品を作るために広いスペースが必要なことを、子どもたち自身が気付くような環境構成や保育者の関わりを検討されてもよいかもかもしれません。また保育者のねらいがエピソードの途中に記入されている箇所も見受けられましたので、すべて考察でまとめると、すっきりとした構成になると思います。さらに、貴園の様子が全く分からない他人が読むことを意識されて、状況等を説明されるとよいかと思います。この4歳児たちがどんな5歳児となっているのか、次の報告をお待ちしております。